

論文の要旨

論文題目 戴季陶政治思想の研究
日本との関わりを通して
氏名 董 世奎
学位 博士（学術）
授与年月日 平成 18 年 7 月 31 日

戴季陶(1891-1949)は、中国において、反共産党のいわゆる戴季陶主義をもって名を知られる。1980年代まで、中国では戴季陶主義を批判する論文が数多く見られたが、イデオロギー批判の色が強く、正式な戴季陶研究が現れ始めたのは、1992年からである。しかし、それも戴季陶の伝記を中心としたもので、戴季陶の政治思想について、とりわけ日本との関わりから行った研究は、まだ見つかっていない。

本研究は、まず戴季陶の人物像を捉え直すことから始まり、その上で、戴季陶が受け入れた近代的国家思想、戴季陶の国家思想の展開と変形、戴季陶主義の成立というプロセスをたどり、戴季陶の政治思想にアプローチした。

第一章においては、戴季陶の精神的特質に着目し、今までの研究よりいくつかの点で戴季陶の実像に迫ることができた。

まず戴季陶の人生経験や自伝小説「子規啼」から彼の気高さと精神的脆さを見ることができた。そして、1922年10月、戴季陶が長江に飛び込み自殺を図ったのは恋愛と証券取引の失敗によるものであることを突き止めた。（若き戴季陶は、女性問題において人間の欲望と社会倫理の矛盾にいつも悩んでいた。）

また、活動力において、本研究は、若き戴季陶がいつもブームに乗りたがる性格であることを明らかにした。しかし、革命の失敗を経験している内に、政治的には保守的になり、国民革命の時代になると、潮流には乗らず、国民党左派とも別れをした。

戴季陶は蒋介石の権力掌握と政権維持に尽力したが、1949年国民党政権の失敗が大きなプレッシャーとなり、孫文の命日を選んで自殺した。

第二章においては、戴季陶が日本留学中に学んだ国家思想について主に憲法思想、民衆思想、民族主義の面から検討した。主な研究結果は、以下のとおりである。

戴季陶の初期の国家思想は、民主主義国家思想であった。彼は世界の潮流は民主主義であると認識していた。国家の主権は君主にあるのではなく、国民すなわち国家であると主張していた。戴季陶の国家思想は、筧克彦から学んだものであった。筧の国家理論は、自我・他我・絶対我というフィヒテ流の思想に基づいているのに対し、戴季陶は、「自由意志」、「国家精神」というヘーゲル流の思想を根拠にしていた。しかし、その実際は往々にして自然主義的であり、とりわけ、民主主義者として国家契約論 に対する無理解が大きな欠点であった。とはいえ、決して高綱博

文氏が指摘したような「超国家主義者」ではなかった。

戴季陶の国家思想の最も重要な内容は国民思想であった。それは「国民即ち国家」という彼の理念にふさわしいものである。そのような戴季陶の国民思想は、対内的には民衆思想であり、対外的には民族主義思想であった。

民衆思想には、あるべき国家とあるべき人民の二つの側面があった。あるべき国家として、人民は主権者であり、政治は人民のためのものでなければならぬと、戴季陶は認識し、主張していた。一方、あるべき人民の場合は、国民精神と民力の二つの面から主張を展開していた。戴季陶は一般国民の病的な精神状態を批判し、その改革の必要性を訴えていた。彼は民主主義革命を念頭に民衆に独立精神よりも反抗精神を求めている。革命の主動力として青年、とりわけ青年知識人に注目していた。

戴季陶の民族主義の始点は反満思想であった。ただ、彼本人はそれを主に革命思想として自覚していた。ナショナリズムという意味での戴季陶民族主義は、列強の侵略による亡国の危機感から生まれたものであった。日韓併合の時点から絶えず国家安全の問題を取上げ、政府や一般の国民に警鐘を鳴らしていた。

しかし、安全対策という面で、具体的な政策主張はなく、ただ革命が成功すれば、国家や人心を一新することができ、そこから生存の道が開けると信じていた。戴季陶の民族主義思想は、その民衆思想に比べ、いささか生彩の欠くものであった。

本章における研究結果の内、なお以下のようなものがある。

戴季陶の二分法哲学を指摘し、その由来を突き止めた。戴季陶のものと思われた『民報』への投稿「仇一姓不仇一族論」、「闢非民族者」、「預備立憲之満州」などは、戴季陶の文章でないことを突き止めた。国家膨張論において徳富蘇峰の影響を受けたことを指摘した。

第三章においては、戴季陶の自治思想および民族と革命思想の変遷について検討した。

戴季陶は「中華民国と連邦組織」を著し、アメリカをモデルにして、省長民選と地方自治を力説していた。経済面においては、中央銀行制度の実施など、国家資本主義の実施を促していた。先行研究においては、戴季陶の自治思想に対し評価ばかりしていたが、その現実性の問題については論及されなかった。

革命の成功が望めない中で、戴季陶の民族主義も、革命思想も流動的になった。

第四章においては、戴季陶主義の成立および戴季陶の『日本論』について検討した。戴季陶主義のもっとも中心的な概念は、「誠」であった。「誠」とは、古代の祭祀に使われる作法の一つで、『中庸』の「中」に由来したものでなければ、孔子の「忠」「信」の概念から変化してきたものでなかった。武内義雄博士が、「誠」は子思の『中庸』以降の『孟子』に現れた概念と考えていたが、博士の見当違いであった。

戴季陶は民生哲学の中心概念に「誠」を取り入れた。彼にとって、「誠」は軍人の精神であった。このような思想の形成は、彼の日本研究の結果であり、とりわけ山鹿素行や「軍人勅諭」の影響によるものであった。

戴季陶はアメリカを建国のモデルとしていたが、国民革命に至っては、明治日本をモデルとし

て注目するようになった。彼が右派に変身したのも、このような背景と無関係ではなかった。
『日本論』については、日本でのこれまでの受け止め方を点検し、その性格を徹底的に追究した。
その基本的な狙いは、日本との戦争を避けることであったが、中国青年に反共思想を教えるため
にも使われた。